

朝野新聞

第千三百九十八号

夜目も知らぬ梅の香と慕慕の闇の取
 違へ跡の野とまよ山にて二人り手にまよ
 鳥がたぐく東雲ちりけ薄明り女一男乃
 面を見て然然と驚きつゝ其計は村
 の権平さん扱ひ昨夜の睦言へと魂消く
 女ハ忙然たりその驚きをわらわだ首丈
 惚へ此已に恥とせそ其後梅と草まよ
 ちんく鴨中ら能くも親ら氣お悩ぬは
 離縁とあり又も夫と持多し梅に心ひら
 ぞろ芝居の小屋で送合てるの咄と立
 聞し先へ廻り身なり色首尾もろの梅の
 暮かろとと女ハ氣の廣のまよも扶のつひ
 所も遠州濱松の程遠くぬ行岡村其まよ
 意地と張るこも己が女房めらるるつと取
 多てはひて恨も悪覚悟究めく傍の
 身と消めんと馳行と留ても止らぬ女の念力
 折々来かろ相撲取勇川何其か漸々
 歩し土俵際物言附け親元へ届け
 其後物ごとく成しと



明治十二年 仲 届
 三月十八日
 初売四月九番地
 西一山崎徳三郎
 出版人吉 藏

明治十二年 仲 届